

物質工学連合部会
第6回デザイン分科会 議事録

期 日：平成8年6月20日（木） 13:30～20:30

会 場：B-Con Plaza 別府市山の手町12-1

1. 参加者受付 B-Con Plaza 3F 第31会議室 前 12:00～13:30

2. デザイン分科会本会議(第31会議室) 13:30～14:20

(1) 開会 大分県産業科学技術センター 次長 森 俊明

(2) 挨拶

●大分県商工労働観光部長 板井 政巳

あいにくの天気の中、全国から大分県に来ていただき歓迎いたします。
消費者のニーズの多様化、複雑化により少量多品種の傾向にあり、サービス、商品の個性化、高品質化がみられます。より豊かな生活のイメージを高めた情報を発信するためにデザインの持つ意味は大きい。第6回目となるデザイン分科会での情報交換やお互いの切磋琢磨により地域経済の振興のために役立たせてもらいたい。

●生命工学工業技術研究所兼、物質工学工業技術研究所代理

医用工学研究室長 口ノ町康夫

現在では、大企業中心の技術開発から中小企業が力を付けてきている。今後とも地方公設試との技術交流を進めていきたい。高齢化社会においてデザインは重要である。特にこれからはバリアフリーやノーマライゼーションの考え方が大切である。これを実現していくことが21世紀の豊かで暮らしやすい生活の実現につながる。デザイン部門では新しい波が起こりつつあり、良いチャンスに恵まれている。みなさんで新しいデザインの大きな波を作っていただきたい。

●デザイン分科会長 横浜市工業技術支援センター 関口 逸平

今年度からデザイン分科会長という非常に重要な役目を仰せつかっております。精一杯がんばりたいと思いますのでよろしく申し上げます。

産工試が発行していた工芸ニュースに戦後1年も経たないうちにデザイン分科会の前身の会議が開かれており、戦後いかに軍需産業を切り替えていくかという熱心な討論をされている。

また、全試展の前身となるような第1回中小企業振興工芸展が昭和24年の東京三越で開催されている。全試展は現在のデザイン分科会では研究発表という形で受け継がれているのではないかと思う。次の世代につながるような熱心な討論が必要とされ、これからはデザインの本当の力が必要になってくるのではないか。

(3) 議長 大分県産業科学技術センター センター長 南條 基

(4) 議事

a. 指示連絡事項

物質工学工業技術研究所

物質工学連合部会第5回繊維部会総会が栃木県で開催された。

第5回物質連合部会総会が7月8日に筑波研究センターで開催される。

生命工学工業技術研究所

人間生活関連研究者名簿の作成について募集。

(財)日本産業デザイン振興会

今年7月18日にGマークに申請された商品3千点の内覧会を有明国際展示場にて開催し、様々な企業の最先端の商品が展示される。今年Gマークが40周年記念ということでコレクションを始めている。展示会を東京、大阪にて開催する。

b. 提案要望事項

広島市工業技術センター：谷本

インターネットによる公設試のデザインネットワークの構築について。各県の公設試がホームページを作っているが、もっと違った形でホームページのあり方についてデザイン分科会で考えられないかと思っていたが、デザインネットワーク研究会の設置の提案があったため、その研究会に参加し、解決していきたい。

広島は家具産地の一つですが、家具業界からの要望で廃棄を考えた家具の作り方はないのかとの提案があった。このことについて平成10年度以降に研究

を行う予定である。

青森県工業試験場：石川

昨年秋の研究発表会で提案したものであるが、最近関係業界からインターネットのホームページデザインの質問を受ける。また、地場の工芸品の画像データベースをネットワークを通じてすぐに検索できたらよいのではないかとという考えも含めて、研究会の設置を共同提案した。

できれば独立した研究会としてつっこんで話をしたいのだが、すでに CAD 研究会が A、B に分かれているのでこの形でじっくり話がしたい。デザインは新しいことに対して即応できるような形で、基本的には 3 研究会で行い、新しいことが生まれたときにそのことにつっこんだ研究会としたい。しかしそのまま続けるわけではなく 3 年なり 5 年なり結論がでたら解消するなりしてほかの研究会に吸収されるという方法ができれば良いのではないか。

静岡県デザインセンター：佐野

研究会の中で提案していく内容ですが、今まで CAD 研究会の中で青森県のような動きがあり今後について焦点を絞りきれずにいたのだが、みなさんの所有しているデータを 1 カ所に集めいつでも閲覧できるようにしたら良いのではないかと考え提案した。当センターで関係業界やデザイナー向けに独自の通信ネットワークをたて通信する環境を作ったため、その一部を研究会のために当てたらどうかと思い提案した。このことについてはこの後の研究会で深くつっこんで討議ができたかと考えている。

(質問)

新しい研究会として独自に活動していくのか、どうか知りたい。

青森県工業試験場：石川

できれば独立して行いたい。

分科会長：関口

先ほどの青森県の石川さんの意見については秋の研究指導事例発表会で提案されたものですが、新たにデザインネットワーク研究会を作るのかということについて、3 研究会は、埼玉県をはじめ茨城県が事前に調査を行い、とりまとめ、討論してきたという経過があり、実質的に新研究会で行うのは今回が初めてである。このように考えると、この時点でいくつも研究会を作るのは、更

新後 1 回目から研究会について討議するのかということになります。

一方でネットワークを使ったデザイン指導や研究等、緊急のテーマであるともいえます。

(議長)

新しい研究会設置に対してどう考えればいいのか忌憚のない意見をお願いします。

分科会長：関口

この3つの研究会はこれが実質第1回目になるのでこのまま進めてもらいたい。すでに開催案内にあったように情報・CAD 研究会が A・B のグループに分けさせていただいた。ちょうど13名ずつということで、今までCAD 研究会は30数名でほとんど討論できず、みなさんの意見が聞けないという状況でした。今回はちょうど二つに分かれ、より深く討論ができるのではないかと思います。ネットワークという言葉を入れて欲しいというのであればネットワーク・CAD 研究会ということでよいのではないかと思いますので、運営についてはCAD 研究会の裁量で運営して欲しい。実質的に深い討論ができればよいのではないかと思います。

分科会長として以上のような考えをもっています。

(議長)

これでよろしければ拍手をいただきたい。(拍手にて承認)

c. その他

特になし

◇休憩◇

14:20~14:30

3. 分散研究会(第31会議室)(第32会議室)

● 情報・CAD 研究会

(CAD/CAM・CG or ネットワーク・DB)

14:30~15:30

・CAD/CAM・CG 部会

幹事 鳥取県工業試験場：清水文人

静岡県デザインセンター：佐野

従来の CAD 研から情報・ネットワーク部門が分離されたことで、インターネットを含む公設試の情報共有の部分はそちらに任ずとして、これから CAD 研究会としては、CAD の技術論・方法論に絞って討議した方が良いかと思われま

横浜市工業技術支援センター：関口

CAD/CG の成果物としては秋のデザイン分科会で報告していただくこととして、今日の会議は各県の現況をみなさんから報告していただくという形をとってはいかがでしょうか？

また、研究会は 2 つに分かれてといっても全く別な会になるのではありませんから、ネットワークのことなど何でも取り混ぜて、ニュートラルな立場でみなさんに話し合っていたいただけたらと思います。

鳥取県工業試験場：清水

それでは、鳥取県の状況についてお話しします。本会議での提案事項にあったように、今年度より福岡・広島・鳥取・滋賀の 4 県で高齢者の生活支援技術というテーマで広域共同研究を行います。その中で鳥取県は「入浴介護支援製品の開発と評価技術に関する研究」を行います。

特徴としては、従来のデザインデータベースあるいは製品開発手法的な方法論の研究ではなくて、具体的にデザインの結果としての商品はどうあるべきかということを中心に据えて行っていこうと考えております。以上です。そうしますと、和歌山県さんから順番にセンターの CAD や CG の現状や企業の状況などを話してください。

和歌山県漆器試験場：旅田

和歌山県はデザイン分科会にあまり参加しなかったもので、CAD/CG について、ここに集まっていられるみなさんの意見を聞かせていただこうと思っています。

兵庫県工業技術センター：真鍋

兵庫県は、ご存じのとおり震災で研究はあまりできませんでした。昨年度は物的・人的な援助をいただき大変ありがとうございました。その後、震災対応予算や国の施設補助を受けセンターもようやく震災以前の状況に戻りつつあり、現在、但馬のカバン産業の地域集積事業にともなうカバン製造の CAD/CAM

化の研究を行っているところであります。

横浜市工業技術支援センター：関口

本県は、3年前にCAD/CAMを導入しスカーフのデータベースを作成しており、3次元計測機器を導入し移動計器の開発を行っております。デザインについては、もの作りだけではなくて情報提供・情報発信が大切だと考えております。

沖縄県工芸指導所：大城

木工・織りでCADを使っています。パッケージやグラフィック関係でCAD/CGを利用することは多いのですが、3次元のCADが活躍する場面は少ないようです。他県さんの事例を参考にしていきたいと思っております。

青森県工業試験場：館山

昨年度インテリアデザインをメインに考えたCAD/CGシステムを導入しました。3次元CGは、業者に設計図面を持ってきていただき、それをCADデータに変換してCGで再現するといったことを行っています。

愛媛県工業技術センター：山本

県内業界はタオル・焼き物が中心となっています。タオル業界などはCG画像から直接、織機を制御するシステムを導入しております。デザイン画はマッキントッシュで行っています。センターでは2年ほど前から、海産・珍味関係のパッケージデザインの方へとシフトして行っています。今後、どう行った展開をしていっていいのかが問題となっています。

大分県/日田産業工芸試験所：安田

家具・木工・木竹のデザインを主に行っています。家具の業界間のデータ交換ができればと考えています。

会津若松技術支援センター：出羽

5年前に導入したワークステーションが今では古くなっているが買い換えられない。今後の展開として、バーチャルリアリティをねらっていくのがよいのかもしれない。地場の会津漆器からのCGの要求は少ないようだ。これからはインテリアとの絡みでCGをやっていきたい。

茨城県工業技術センター：佐藤

業務としては、建具業界が中心となっている。従来、茨城県は日立の城下町として発展してきたが、生産の海外進出にともないその傾向も薄れてきた。下請け業者を中心にデザインで活性化が行えないかと考えているところです。

大分県産業科学技術センター：兵頭

平成6年度に三次元CGを導入し、マッキントッシュ上でアニメーション作製を行っています。

また、AutoCADを使い近代工業へのデザイン支援やFRP造船業などのデザイン支援を行っています。平成7年度からプレゼンテーションを中心に研究をしています。

岩手県工業技術センター：有賀

岩手県は、平成6年度に工業技術センターと食品加工研究所が一体化となりました。県内業界は木工関連が主で、工芸・デザインを中心に活動を行っています。

センターでは5軸のNCルータを使って加工を行い、そのデータはマッキントッシュのCAD/CAMで作製しています。現在までに、酒造組合のラベルのデータベース化や光造形機を使った南部鉄瓶関係のデザインを金属部門と共同で開発しています。

滋賀県信楽窯業試験場：伊藤

二次元で焼き物のシミュレーションを行っています。この業界では2~3社がCGの導入を行っています。焼き物のもつ素材感をどう表現するかが難しいところです。インターネットを利用したデザインネットワークができればおもしろいと感じています。

静岡県デザインセンター：佐野

当デザインセンターは、研究期間として位置づけられていないので、あまり研究といったものはできないのですが、県内にはサンダルが地場産業としてあるので、高齢者・障害者用のデザイン研究を行っているところです。また、人間の顔をCGで6種類ほど作製し、展示会で発表してアンケートを採りました。さて、この場を借りて、静岡県デザインセンターの施設紹介をしたいと思います。静岡県デザインセンターでは、デザインセンターと企業を結ぶ通信ネットワーク「CM-Net」を開設しています。これは、FirstClassを利用して、データ通信・データ転送・ブラウジングなどのネットワークサービスを行うもので、

県内のみならず県外でも利用できます、また、資料にあります「デザイン開発総合支援システム」も同時に利用できますので、みなさん活用してください。

以下、和歌山県、沖縄県から静岡県ネットワークについて質疑があった。

総括

全体意見として、各県とも初期の CG 導入が完了し、それらを研究・指導に活用されているが、企業の利用実態としては商業デザイン・パッケージ・プレゼンテーションなどの 2 次元 CG が主であり、三次元の CAD・CG は公設試には導入されていても企業側の利用は少なく、これからというのが現状のようである。

また、インターネットをはじめとするデザインのネットワークに関心を持たれているが、明確な利用方法が確立されていないことに苦慮しているようであった。その中で、静岡県デザインセンターから通信ネットワーク「CM-Net」及び「デザイン開発総合支援システム」の紹介があった。その取り組みには各県とも、施設・運用面において強い興味を持たれていたようだ。

・ネットワーク・DB 部会

1. 幹事選出

幹事 石川（青森工業試験場）
副幹事 野上（滋賀県工業技術センター）
仲村（高知県工業技術センター）

2. 参加者機関のネットワーク関係現状報告

インターネットへは昨年度接続した機関がほとんどであり、ホームページについても同様に昨年度から今年度にかけてほとんどの機関で立ち上がる予定である。

県庁についても同様の状況で、ここ 1・2 年でほとんどの県で立ち上がるものと思われる。

3. 研究会のテーマについて

- ・ ネットワークの活用例として、全国の試験場による分散データベースの構築が考えられる。

- ・ 題材としては、どこの試験場でも参加しやすいものとして、文様などのグラフィックデータが考えられる。
- ・ いま、WWW サーバに代表されるデジタルコミュニケーション分野が、デザイン産業のなかでも重要な分野になってきており、これらの情報交換が必要であろう。
- ・ 企業への指導を前提にした場合、商取り引きへの応用技術も重要な要素ではあるが、この研究会で取り上げるテーマにはふさわしくないのでは。
- ・ メーリングリストについて、公設試だけでなく通産省や産デ振も参加してもらう必要がある。

4. まとめ

本研究のテーマは以下の三つとする

- 1) グラフィック分散データベースの構築について
- 2) (WWW を中心とした) デジタル・コミュニケーション・デザイン技術について
- 3) ネットワーク技術について

メーリングリストに通産省や産デ振の参加を呼び掛ける。

研究会の活動については、随時メーリングリストなどを活用し進める。

● 地域デザイン振興研究会

代表幹事 奈良県工業技術センター：山野幸夫

内容：地域産業へのデザイン振興・施策・支援事例などについて、意見交換を行なった。

別府産業工芸試験所：久津輪

- ・ 大分県の工芸事情紹介
- ・ 別府産業工芸試験所の紹介（試作品展示等のリフレッシュ。翌日、同所を視察）
- ・ 伝統的工芸品産業の全国会議（平成 8 年度）及び生活文化祭（アジアの竹と文化に関する行事開催平成 10 年 11 月）の紹介。また、後に、久津輪氏が理事長を務める九州クラフトデザイン協会の近況と公設試との関わりについて紹介があった。

岐阜県陶磁器試験場：小稻

- ・ 全県的な組織改正と科学技術振興センター（衛生環境部・商労部・農政部等、試験研究機関の統合再編成）の紹介

産業デザイン振興会：田中

- ・ 地域のデザインコンペ（関市刃物など）事例紹介
- ・ Gマークの近況紹介
- ・ デザインネットワークづくり（全国デザインセンター会議など）の紹介

愛知県工業技術センター：山本

- ・ 国際デザインセンター、科学技術工芸財団の紹介
- ・ プロジェクトによる福祉機器の製品開発事例紹介
（デザイナー、技術者、医師、介護者、使用者、工業技術センター等の連携重要）

広島市工業技術センター：谷本

- ・ 車イス利用のための電動家具（テーブル、食器棚など）開発事例紹介
（アフターケア、メンテナンス、PL法などの課題と製品化の難しさ）
- ・ 異業種交流研究会、デザインコンペなど、コーディネータ的企業支援事業の紹介

神奈川県産業技術総合研究所：青木

- ・ 生産現場を重視した地場産業振興とデザイン支援について紹介

奈良県工業技術センター：山野（代表幹事）

- ・ 中小企業における製品開発、コンセプト支援の重要性、デザイン振興事例など、電子メールやネットワークの活用を図りながら、地域デザイン振興研究会の運営に努めたい。

以上、時間的な制約の中で参加者全員にお話しをしていただく事は出来なかったが、その他デザインセンターの活動状況、デザイナーとのプロジェクトによる地域産業の振興や支援施策などについて、一部事例紹介や話題提供があった。

●生産デザイン研究会

幹事選出

まずはじめに、群馬県工業試験場の松野幹事の任期終了につき、新幹事の選出を行う。新代表幹事に埼玉県工業技術研究所の山中康司、幹事に三重県工業技術センターの新木隆史氏を選出。新体制のもとに討議を始めた。

討議事項

－はじめに－

全国的に各公設試のデザイン業務が徐々に生産の現場からはなれ、直接的なデザインの研究や技術の問題よりも、付随する行政的業務や、外部デザイナーと業界の仲立ち、イベントの支援といったような周辺の業務に追われる混乱が見られる現状のなかで、あえて「生産デザイン研究会」を選んだ理由と現状を出席者一人ずつ述べてもらい、その中から共通する問題を掘り起こし、今後の課題とし、できれば将来の共同研究へ向けての可能性をさぐることにした。

－各公設試の報告－

<注>以下の記述は討議中のメモを書き起こしたもので、聞きもらしなどもあり、言い回しや内容は実際の発言とは若干の食い違いがある。

石川県工業試験場：崎川

- ・ 普段は機械を担当している。CAD 研究会などとは異なった内容で、生産関連の問題を話し合うグループをやってほしい。インターネットを利用してホームページの交換やそれぞれの研究のキャッチボールができればいい。

栃木県工業技術センター：糺谷

- ・ いままで、生産と言うと、産地振興のため、いかにコストを下げるか、量産するための機械の都合、分どまりなど作る側の都合ばかりを考えてきた。こうしたコスト第一主義の生産論理ではいずれすべて東南アジアに食われてしまうだろう。改めて「ものづくり」の原点に立戻って使う側に立った生産のあり方を考えなおす必要がある。

都立工業技術センター：金谷

- ・ 普段は依頼、指導に時間を取られていて余裕がない。かつては「CAD 研究会」に入っていた。どの研究会に入ろうかと迷ったが、公設試の役割を考えた場合、やはり開発ではないかと思う。栃木県の糺谷さんのはなしを解釈しなおすと「人にやさしいものづくり」と言うことになると思う。この点を掘り下げて共通の問題点を見つけ、「テーマ」を設定すればいいのではないか。

群馬県工業試験場：松野

- ・ 「ものづくり」に入る前段階のデザインの認識の度合い、コンセプト、あるいは経営者のデザインの理解度、自社製品としてのオリジナリティなどが非常に重要である。そのために経営者のための商品開発セミナーをおこなっている。また2年くらい前から県内デザイナーの集約をやっている。なんとか、産地の活性化をはかり、ブランド商品を出せるようにしたい。

三重県工業技術センター：新木

- ・ 全国試験所作品展がなくなってから、「ものづくり」の現場からはなれ、ここ10年くらいは外部デザイナーを使っただけのコーディネートみたいなことや、情報づくりをやってきた。あらためて、基本に立ち帰り、視点を変えて「人にやさしいものづくり」を考えていきたい。10年前に比べてインターネットなどが整備されつつあるのでデータのやり取りなどもできるだろうから、よりやりやすくなると思う。

岐阜県工芸試験場：奥山

- ・ 4月から機構改革があつて、農林関係は一本化され、人の配置も横断的になり、7名の職員も7ヶ所に分散させられ、それぞれテーマを持って研究にたずさわっているが、センター構想もあつて、落ち着かない状況にある。試作開発、産業振興、人間工学、パッケージデザイン、CGの研究などいろいろやっている。以前やった民間企業数社と組んで実施した高齢者用の立ちあがり補助椅子はメカ部分を当公試で担当し、特許も取れたが、メカ的要素が目立ち、デザインの成果として評価されず、残念に思っている。「生産デザイン研究会」に入るかどうかは迷ったが、日常、家具を主体とした生産の現場にいるのでとりあえず入ることにした。

鹿児島県工業技術センター：中村

- ・ 以前は木材工業部で家具構造を担当していたが今度デザイン工芸部にまわされた。この前JAICAの研修を3ヶ月受けたが、東南アジアの熱気と勢いはすごくて、日本からの技術の流出はとてめ止められない。どうすれば地域の産業を育成し、空洞化を避けられるかは大きな問題である。現在、鹿児島のデザイン協議会を作るためいろいろ試みているが、おおむね軌道に乗っている。

長崎県窯業技術センター：山下

- ・ 普段、陶磁器の生産にたずさわっているので「生産デザイン研究会」の方が解りやすいかと思って入った。陶磁器の世界でも海外から安い製品がどんどん入ってきて、従来どうりの食器を作っていたのでは成り立たず、転換をせまられている。伝統的産業の崩壊の兆しもあって、新しいものづくりを求められている。そのため異分野との交流に期待したい。

旭川市工芸指導所：上田

- ・ 私共は主として家具産業のために仕事をしているので、「生産デザイン研究会」は家具が中心だと聞いて入った。やはり、旭川でも円高の影響で厳しい状況にあり、危機感がある。今までは売れるもの優先のものづくりをしてきたけど、コスト一辺倒ではない使う側に立った開発、「人にやさしいものづくり」をやっていかなければならないと思う。

埼玉県工業技術研究所：山中

- ・ 情報とかインターネットばかり追いかけても、肝心の発信できるデータと言うか成果を出すための日常的な地道な研究がなければ話にならない。各公試とも厳しい状況にあるが、生産の現場を見ずえたものづくりをあらためて考え直さないといけないと思う。ただ、「生産デザイン研究会」で何をやっていくかとなると、年1回しか集まれないし、しかもメンバーが固定していないので大変むづかしい。従来どうりの「情報交換の場」になる可能性は多分にある。
- ・ 今までの皆さんの話を聞いたところでは、共通のキーワードは「人にやさしいものづくり」らしいので、この辺をもっと掘り下げていきたい。しかし、実際には「人にやさしい」と言った抽象的で情緒的表現はわかりにくく、誤解を招きやすいので、もっと具体的に煮つめなければならぬと思う。その辺の作業を今後皆さんと連絡を取りながらやっていきたい。

ーまとめー

討議結果

いままでの作る側の都合—コストや生産効率優先の「ものづくり」—から、使う側に立った「人にやさしいものづくり」に転換する必要がある。「人にやさしいものづくり」の解釈には様々な答えが考えられるが、ここではたとえば、バリアフリー、リサイクル、少資源、環境問題、無公害などの視点からの「ものづくり」をめざす。とりあえず「生産デザイン研究会」では「人にやさしいものづくり」をキーワードにし、何ができるか相互連絡を取りながら可能性を

探って行くこととする。

4. 全体会議(第 31 会議室) 15 : 30～15 : 50

(1) 研究会報告 14 : 30～15 : 30

●情報・CAD 研究会(CAD/CAM・CG or ネットワーク・DB)

・CAD/CAM・CG 部会

・幹事 鳥取県工業試験場：清水文人

3～5 年前に各県でコンピュータがそろいはじめ、主に業界への支援としてはグラフィック、パッケージ、プレゼンテーション関係に使われているケースが多い。3DCG は業界の方が製造業、クラフト関係にしても業界は対応していない。公設試の中には導入されているが全体としては活用されていないという報告が多かった。静岡県からネットワークについての提案がありました。それに関連して静岡県ではデザイン開発総合支援システムについて紹介があった。

他県の人でも利用できるのも、例えば 3 次元の立体造形出力等で活用できる。

・ネットワーク・DB 部会

・幹事 青森県工業試験場：石川善朗

各県に導入されているハードウェア関係の報告。すでに運用している県と、これからの県とかなりばらつきがあるので調整が必要。3 つの柱を立てた。

- 1、ホームページのデザイン、
- 2、画像データベースの構築、
- 3、勉強会（インターネット等）

・副幹事 滋賀県工業技術センター：野上雅彦

当センターで公設試デザイン担当者のメーリングリストを今年の秋から運営している。インターネット、ニフティ、PC-VAN 等でメールアドレスを持っている方は登録していただきたい。公設試に限らず産デ振や通産省の方も入っていただけたらと思う。

●地域デザイン振興研究会

・代表幹事 奈良県工業技術センター：山野幸夫

はじめに別府の産業工芸の現状について話があり、引き続き各県のデザイン、デザイン協会が地域振興についてどのような活動をしているかについて事例を

交えて発表し、意見交換を行った。行政の上でのデザインの位置付けがどのように変わっているのか等の情報交換をしながら研究会を続ける方針。

●生産デザイン研究会

・代表幹事 埼玉県工業技術センター：山中康司

全国の試験場が生産現場から遠のきつつある現状の中で、地場の業界を抱えている我々としてはもう一度生産の現場を見直し、物づくりを逆に考え直す必要があるのではないかと。今まではコストや生産技術等という作る側の論理で物づくりがされてきたがもう少し使う側、ユーザー側の立場に立った物づくりをしていかなければならないのではないかと。

それをまとめていうと人に優しいデザインといえるのではないかと。この「人に優しい」は抽象的・情緒的すぎるので、これは高齢者用の物であり省資源や地球環境考えたデザイン等、次回から具体的なテーマで掘り下げていき、できれば共同研究のような取り組みを行いたい。

(2) 質疑・応答

時間の関係から懇親会等で質問をしていただきたい。

(3) 次期開催県について

今年度は大分県で開催。秋の第7回デザイン分科会研究指導事例発表会は東京都立工業技術センターにお願いし検討中。研究発表の応募をお願いしたい。

平成9年度は順番で近畿地区にお願いしたい。すでにデザイン分科会が開催された京都府、大阪府、兵庫県であります。ここ12～3年間に開催されていない県は和歌山県、奈良県、福井県、滋賀県ですので開催しても良いという機関があればお願いしたい。

平成9年度、秋の分科会は首都圏が開催する事になっているので、順番として神奈川県が担当という事をお願いしたい。

(4) その他

◇休憩◇

15:50～16:00

5. 地域開発事例セミナー(第31会議室)

16:00～17:00

テーマ：「由布院のデザイン」

講師：株式会社「玉の湯」代表取締役 溝口 薫平 氏

今でこそ湯布院は一般に知られているが、私の学生時代や若い頃は全く知られていなかったため、自分のふるさとしてある湯布院をみなさんに知ってもらいたいという気持ちから、37、8年間様々な活動をしてきた。

湯布院で日常生活が楽しめる環境づくりを目指すと共に、その土地の中で生き続けることの楽しさや役割を作っていこうと考えた。そのためには湯布院を舞台にし、そこに人を引き込んで勝負するのがよいのではないか。

湯布院は、隣町である別府の生き方、町づくり、温泉地づくりと対比してきた。今の湯布院があるのは別府のおかげである。

昭和30年代は高度成長期であったため、大きいことはいいことだ、地域を開発して施設（箱物）を作ってお客様を迎えようという風潮があった。その代表的な別府は、国際観光都市として多くの施設を作った結果、空間としての美しさや海からの美しさが損なわれているという現状を見据えた結果、熱海や別府を代表とする大型先進観光地の生き方と対比させることで、湯布院の生き方を模索した。

私たちの最初のテーマは、「小さな別府になるな」であった。

別府にないものをつくっていこう、大型観光都市にない物を作ろう。当時それでは飯が食えないといわれたが、飯を食えるようにしていくために知恵を絞った。

当時、別府の調査研究を行うと、男性社会にとっては一時的に楽しく、客は、朝方に空しく帰っていくような状況であった。次の世代を担う子供の教育環境を考えたときに、別府はその生き方で良いのだろうかという疑問が残った。また、別府は夜の観光地であるが昼の観光地ではないということを見つけた。

では、湯布院は昼の観光地にしていこう。みなさんがほっとする空間や癒される里作りをやっていこう。また、女性を中心とした観光地を作っていこう。

新しく観光施設を作るのではなく、小さい施設の集大成によって湯布院全体にお客さんが回遊するような仕組みができないか。

大型観光地では、大型施設や旅館が大きくなり商店街が衰退していくような状況であったため、湯布院では旅館は小さいが町の魅力、町並み、田園風景、農村を魅力ある物に仕立てる方策を考えてきた。

町の人が演じる文化芸能等の伝統的な物を継承すると共に、新しい文化、イメージとしてのイベントを作ることにより、新しい魅力の観光地のための文化活動を行う。それが、湯布院画祭や音楽祭、牛食い絶叫大会等、食と芸術を中心とした、催しづくりにつながっていった。

昭和46年、我々は、ヨーロッパ9カ国を50日間かけて視察し、外国から見た時に湯布院はどう写るのか、外から湯布院の観光を見ることができた。

様々な分野で造詣の深い方々が湯布院を目指し、愛好するような温泉地であるという印象付け、これが知的産業としての観光の位置づけである。

平松知事が大分県を紹介するときに湯布院をどう語ってもらうか、また、大分県を訪ねてくる人々をお招きしてご接待する場所として、知事の迎賓館としての位置づけにしていきたい。

そのためには、行政のトップへいかに情報を提供できるかが問われる。

湿原植物の宝庫である猪の瀬戸が、ゴルフ場として開発される時に、自然環境を大切にしている湯布院の人々が、その貴重さに気づき環境庁に訴えゴルフ場を別の場所に移した。

現在、湯布院には95の旅館ができています。年間87万の宿泊客、観光客は350～60万。普通は観光客数に合わせて観光施設を作り、客を一步も外に出さないようにするのだが、湯布院の旅館は観光客が回遊するような配慮をしたおかげで、喫茶店や、ギャラリー、美術館が多くできてきた。

湯布院の顔は高原であり、そこには牛が放牧されていたが湯布院の農業の行き詰まりにより減少傾向にあった。何とかして牛を増やし原野を守りたいということから、牛1頭牧場運動を始めた。これは子牛の導入基金として20万円出資してもらい、5年間牧場が預かり、代わりに牛1頭牧場主という称号を出資者に与えた。

この制度により、5年間のうち子牛が3頭生まれ1頭は飼料代に、1頭は出資者の牛として、1頭は労賃として成り立たせることにより、牛を増やすことができた。1年に1回利子代わりに出資者にお返しをしなければならないのだが、農家には現金がない。しかし牛が増えることにより堆肥ができ、米が1俵ほど余分にできる。その米を利子代わりに出資者に差し上げることにした。

この運動は農林水産省から食管法に違反するという警告があり、昭和61年に平松副知事に相談したところ、何らかの方法があるのではないかと励ましてもらった。副知事が農林水産省へ働きかけ、牛によって親戚になった人へ米を、拋出するということで、特別に拋出証明書を作ってもらった。

1年に1回、出資者にお礼の意味を込めてすき焼きパーティーを催し、牛肉で精力を付けた後、由布岳に向かって大声を張り上げ、その声を競わせるイベントとして「牛食い絶叫大会」を行った。

牛1頭運動のおかげで農業が立ち直った事から、感謝の意味を込めて、平松知事に感謝状を贈りたいという案が持ち上がった。やはり一番喜んだのは牛だから、牛から知事に感謝状を送るのがよいのではないかという事で、牛の鼻紋をつけて感謝状を贈った。

玉ノ湯は、周辺の風景を旅館の敷地の中に再現する為、田の土を全部山の土に入

れ替えクヌギ、山桜、樺、柏等を中心とした雑木を植えていった。敷地の中に、はなれが18棟あり、40～50人が宿泊できる。現在、従業員100人を雇用し、年間稼働率90数%である。

ロクロの時松氏や竹の野々下氏、藍染め、陶芸等の技を持った人に湯布院に住んでもらい、町の人にモノを作る過程を見てもらう。使い手の声が生産者に返っていき、何度もいい物が修復して修理をして大事に使われていく修復の技術を町に残すことにより、本物志向を地域に根付かせていく事が大切である。

※参考

湯平と由布院が合併して湯布院となった。今日の観光イメージは主に由布院地区である。

6. 閉会

17:00～17:05